



ART RAMBLE

学芸員の視点 ②③

平成21年度～平成22年度初めの新収蔵品について
—— 出原 均

特別寄稿 ④⑤

都市形成史研究者の見た「神戸風景」、
そして「コウベのヤケアト」—— 中尾嘉孝

ショート・エッセイ ⑥

麗子登場!・・・初夏の夜に描く星座 —— 吉田朋子

トピックス ⑦

「麗子登場!・・・」展開連事業
「2010県展」が開催されました
博物館実習生とこどものイベント

美術館の周縁 ⑧

1941(昭和16)年、山本通一丁目 —— 小林 公

今年度購入した本作品は、当館の前身である兵庫県立近代美術館が1976(昭和51)年に開催した「兵庫の美術家―県内洋画壇回顧」展をきっかけとして発見されたロシア未来派の一連の作品のうちのひとつで、以来当館が長くお預かりしてきたものです。

作者のバリモフは1920(大正9)年10月、ダヴィド・ブルリュークとともに来日し、携えた自分たちと仲間の400点余りの作品を、「日本に於ける最初のロシア画展覧会」と題して東京、大阪、京都で展示しました。本作品は発見当初の段階で、同展覧会出品目録中の「労働者等は工場から帰る」と題する作品と同定され現在にいたっています。

近年では、バリモフとブルリュークのふたりが来日前に極東ロシアのウラジオス

ツクで旺盛な芸術活動を展開していたことが明らかになり、単なる経由地ではない同地の重要性が浮上しています。

これを機に、ロシア・アヴァンギャルドの展開と、その一角をなすロシア未来派および、日本における大正期新興美術運動の関係を、「中心から周辺へ」という従来の図式でとらえるやり方にも再考が迫られています。

本作品のモチーフや描写は未来派的なものでもありますが、作品上部の波を思わせる描写に海辺に近いウラジオストックの街の様子をうかがい、同地での作者の活動をしのぶことができそうです。また、キリル文字によるサインが作品下部の左右の二か所にあります。

コレクションから

(西田桐子/当館学芸員)



ヴィクトル・バリモフ(1888～1929)

《作品(労働者等は工場から帰る)》

1920(大正9)年頃

油彩・布

65.3×70.0cm

平成22年度購入

平成21年度～平成22年度初めの 新収蔵品について

出原 均

2010年9月30日号

1 はじめに

日本画5点、洋画78点、版画9件（総計19点）、彫刻18点、写真等7件（総計56点）、映像1点、総計177点。これが昨年度から今年度初めに当館が収蔵した作品点数である。展覧会を作り上げるのに十分すぎるほどの数量は、県立美術館に移行してからの収集活動では例を見ない。比較的収蔵点数の多かった平成20年度でも93点の作品と1点の資料、その前の平成19年度が37点の作品と1点の資料であることから、この異例さが首肯されるだろう。ひとつには大口の寄贈があったからで、これに久しぶりに実施した作品購入も加わって、この多量収蔵にいたったわけである。今回の収蔵の経緯といくつかの特徴を述べてみたい。

2 赤川コレクション

大口の寄贈とは、日系ブラジル人の実業家、リカルド・タケシ・赤川氏による、ブラジル日系人作家の作品である。絵画62点、版画2点、彫刻1点、計65点。赤川氏は、著名な美術コレクターで、日本の現代美術の世界でも知る人ぞ知る存在。彼の幅広いコレクションの中でもとくにブラジル日系人作家に特化した作品群が当館に寄贈されたのは理由がある。移民を送り出してきた国際港、神戸港を有する兵庫県の美術館へ寄贈し、ブラジルに渡った日本人の活躍を、美術を通して日本にいる人々に紹介したいという赤川氏の強い願いである。

この赤川コレクションの特徴は、何よりもまず、ひとつの流れが形成されている点にある。仕事の傍ら絵を描いてきた移民第一世代にはじまり、ブラジルの美術界で頭角を現した作家の登場を経て、ブラジル内外で様々な活動を展開している日系二世、三世まで。異郷の景色をキャンバスに定着させようと格闘した風景画、第二次世界大戦後に興隆した抽象画、多様な表現が花開く近年の作品を見比べると、大きな時間の流れが感じられるし、また、美術と時代の関係、ブラジルにおける日本



木下佳通代〈untitled〉5点組のうちの1点 1976年



笠置季男〈若人よ空へ征け〉1943年

人の立場、美術家としての地位の変化など、さまざまな側面も垣間見えてくる。

このコレクションの他の特徴として、

- 1) 間部学、フラビオ・シロー、越石幸子、大岩オスカルら、日本の美術館で個展を開催した作家が含まれていること
- 2) 44作家中10作家については2点以上の作品があること
- 3) 女性作家を6名含むこと

なども挙げておこう。

赤川コレクションは、現在、「2010年度コレクション展Ⅱ」（～11月7日）の中でまとまって展示しているが、このような括りだけでなく、今後は、ジャンル、手法、時代など様々な文脈で、様々な角度から個々の作品を紹介していくことになるだろう。

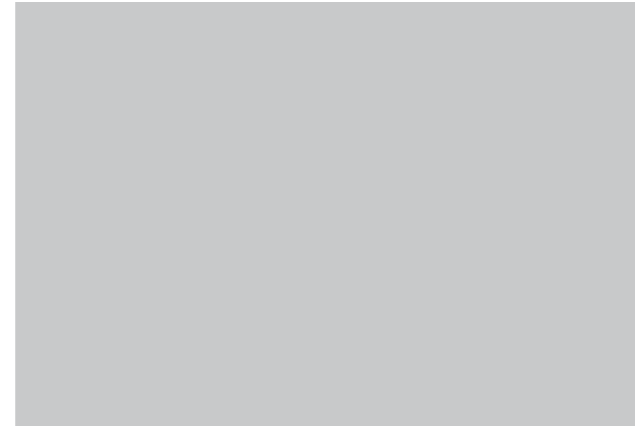
3 収蔵の契機

赤川氏からの寄贈の話は、当館が日本・ブラジル交流展を準備している過程の中で（直接同展と関係はないものの）持ち上がった（同展については「アートランプル」21号参照）。これは一例だが、収蔵に発展しやすい典型例としては、

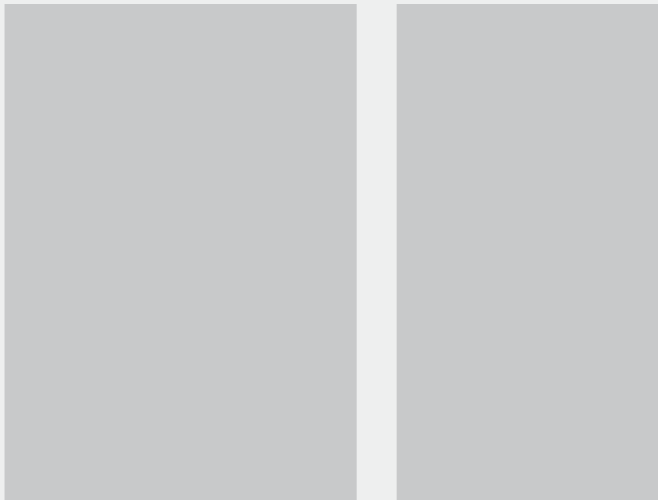
- 1) 展覧会の開催がきっかけになった場合（東山嘉事の立体等の作品群〈寄贈〉、山本六三の版画群〈購入〉）
- 2) 当館が預かっていた寄託作品が収蔵に移行した場合（ロシア未来派のヴィクトール・パリモフの絵画、郭徳俊の絵画、野村仁の写真〈以上、購入〉、木下佳通代の写真と絵画〈寄贈〉）
- 3) 1)と2)が複合した場合（「震災と美術」展に出品し、寄託を受けていた西田真人《瓦礫の街》〈寄贈〉）

などがある。

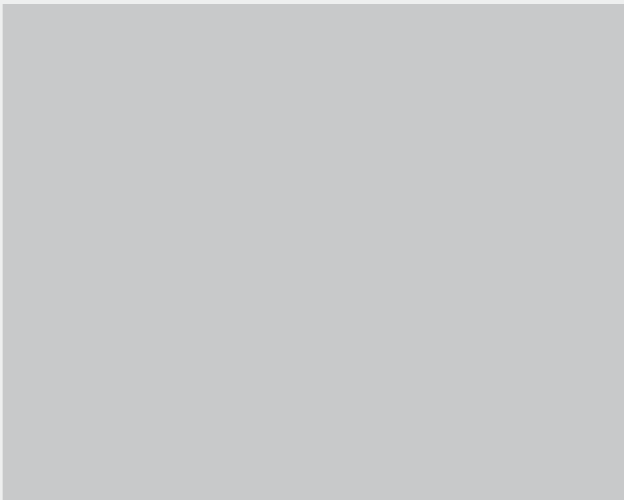
一般に寄託を受け入れる理由は様々だが、そのひとつとしては、その時点ではす



山口勝弘〈ヴィトリオー「静かな街」〉1956年



河口龍夫〈COSMOS-Orion〉1974年



間部学〈無題〉1960年



村上華岳〈白描観音〉1923年

ぐに収蔵できないが、将来、機会があれば、つまり、寄贈ないし購入によって収蔵したいという場合がある。今回、そのいくつかが実現したことは喜ばしい。

一方、展覧会の開催準備は、作家や作品に関して詳細かつ貴重な情報を集める機会であり、優れた作品を収蔵するチャンスでもある。今回も、河口龍夫、横尾忠則については特別展の開催が、東山嘉事、藤本由紀夫、山本六三は、小企画の開催がきっかけである（河口、横尾、東山、藤本、山本については、それぞれ『アートランプル』の17号、20号、22号、25号、26号に関連記事あり）。作品収蔵と展覧会は、しばしば美術館の両輪といわれるように二大事業である（近年では、これに教育普及が加わる）。この両輪のどちらかが欠けても成り立たないし、両輪はつながっていないといけない。展覧会の開催が作品の収蔵に結びつくのは、その意味で望ましいあり方といえよう。

もちろん、購入・寄贈は以上のような場合に限られるのではない。とくに寄贈においては、作家や作家の関係者から話をいただくことがしばしばである（元永定正の彫刻は作家と当館の建築家より、金山平三の絵画、小西保文の絵画、笠置季男の彫刻4点はいずれも遺族より）。また、兵庫県内で保有されていた貴重な作品がなんらかのきっかけで寄贈されることもある（西山翠嶂の六曲一双の屏風、北村四海のブロンズ彫刻。後者については『ピロティ』113号参照）。村上華岳《白描観音》については、故人の方が寄贈を遺言し、その執行として寄贈いただいた。寄贈者の方からすれば、地元の公的な美術館ということもあるが、当館の活動そのものを評価していただいたところもあるのかもしれない。

4 購入

今回購入した作品を購入台帳に記入しようとして、台帳を開けたら、前回の購入日が目に入ってきた。平成14年度である。今回まで約6年間、購入にブランクがあったこ



藤本由紀夫〈EARS WITH CHAIR (HPMA)〉1990/2010年

学芸員の視点

財政的な理由で購入を見合わせる事態が続いており、当館もその例に漏れていなかった。しかし、特別展に傾きがちな日本の美術館も、その資源を最大限に活用する上で、コレクション展を重視し、その魅力を高める必要がある。とくに、近年、コレクション展においても企画性と多様な内容が求められている。コレクションを充実させるためには、寄贈・寄託に頼るだけでなく、一定の作品購入が欠かせない。このような美術館の要望が認められ、今回の購入にいたった。平成21年度後半に作業が始まり、22年度当初に完了するという年度をまたがる事業となった。

今回の購入のいくつかの特徴を述べておきたい。

まず、購入の対象として、主に兵庫県を中心とする関西の現代作家・作品とした。最長老の山口勝弘から中堅作家として活躍めざましい米田知子や束芋まで、世代の幅を広げることも心懸けた。当館に収蔵されている現代美術の大コレクションである山村コレクションが、主に具体美術から1980年代までの美術を集めているから、それを補完するとともに、現在への道筋、少なくともそのきっかけを作ることも意図したからである。なお、近代美術については、これまで伊藤文化財団からのご寄付などによって優品が収蔵されてきており、今回は個人からの寄贈の申し出により貴重な作品が収蔵できたので、パリモフ1点に絞ることにした。

また、一点豪華主義ではなく、点数が多くなるように配慮し、ジャンルの上でもバラエティに富ますなど、バランスをとるようにした。とくに、ジャンルについては、寄贈も含めて次の章で述べることにする。

5 ジャンル

収蔵作品のリストを眺めると、ジャンルにおいて特徴があることがわかる。

まず、写真作品。河口龍夫《COSMOS-Orion》、野村仁《'Grus' Score》、米田知子《見えるものと見えないものあいだ》〈以上、購入〉、木下佳通代〈untitled〉4件〈寄贈〉は、いずれも写真のジャンルに属するが、通常の写真作品というよりも、写真というメディアを使った現代美術というべきである。当館には、1970年代のコンセプチャルな写真作品もあるので、この分野のコレクションの厚みが増したことになる。

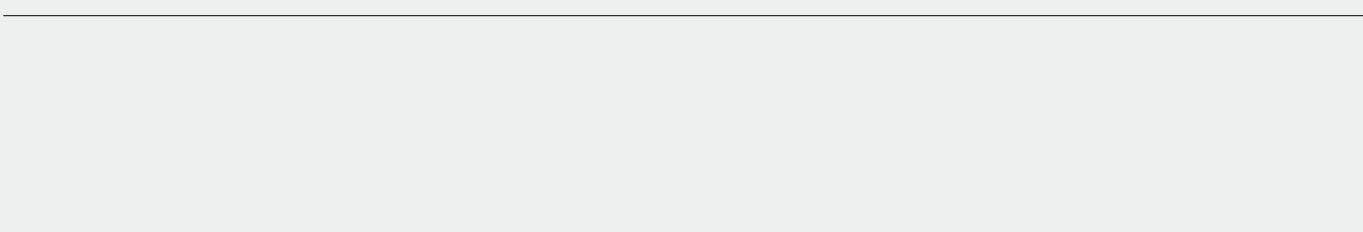
また、映像のジャンルに属する作品がはじめて当館の所蔵品に加わった。束芋が第52回ヴェネツィア・ビエンナーレの企画展に出品した《dolefullhouse》である。

最後に、珍しい参加型の作品を挙げておこう（既収蔵としては、具体美術協会の作品がある）。藤本由紀夫の《EARS WITH CHAIR (HPAM)》と《MUSIC DUST BOX-1》の2点〈購入〉。観客は、作品を鑑賞するにあたり、椅子に座ったり、オルゴールのねじを回したりすることになる。楽しみながらも、深遠な意味を感じさせる作品である。

これらの作品は、当館のコレクションの幅を広げ、他の作品とともに、コレクション展の魅力を増すことになるにちがいない。 （ではら・ひとし／当館学芸員）

都市形成史研究者の見た「神戸風景」、そして「コウベのヤケアト」

中尾嘉孝



今春開催された「写真家 中山岩太ー私は美しいものが好きだー」展の第2部では、中山の制作した昭和10年代を中心として神戸市内の景観を題材とした作品群（以下、『作品群「神戸風景」』。）と、同時代の作家達による洋画、版画、商業美術、絵葉書等とが一体的に展示されたことで、観賞する者に戦前期の「港町神戸」のイメージをより一層強く印象づけていたように思われる。

作品群「神戸風景」の中に留められた神戸の風景に接するとき、都市形成史に関心を寄せる者には、「中山岩太の作品」という以上に、まず貴重な情報の詰まった「タイムカプセル」である、との念が生じる。

当館学芸員の相良周作氏が、今回の展覧会カタログの解説などで詳述されているが、作品群「神戸風景」の多くが、神戸市役所観光課の依頼の下で制作されたことは、広く知られている。こうした事情を加味しても、中山が大丸神戸店（昭和11年（1936）増築、村野藤吾、建替済）屋上から神戸市街地をパノラミックに撮影した3つの作品は、当局による検閲が厳しさを増していた当時では異例の存在だ（注1）。

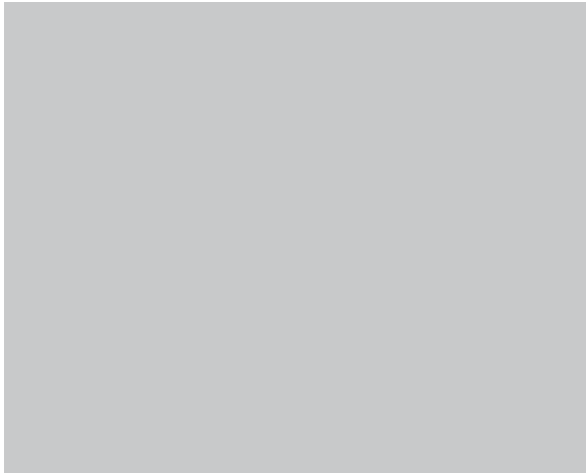
3つの作品を順に眺めると、新旧の混在する「大神戸」の景観が浮かび上がる。明治期に元町通から山手、北野町・山本通にかけて形成された市街地と、これに分け入る形で建設された省線東海道本線（現JR神戸線）の鉄道高架橋が家並みから浮かび上がり、阪急会館（昭和11年（1936）竣工、阿部美樹志、コンコースなど一部現存）そして元町までの延伸を果たした阪神電車のターミナル・阪神会館（昭和11年（1936）竣工、現存せず）や三宮・阪神ビル（そごう神戸店、昭和8年（1933）竣工、久野節）という新しい神戸のランドマークが周囲を睥睨するが如く一際高く聳える。対照的に、神戸一の商業地・元町商店街は、日本動産火災保険神戸支

部（現ナカシンビル、昭和12年（1937）竣工、国枝博）など少数の例外を除き、明治時代から大きく変わらない伝統的な木造2階建の商家の家並みが続く。これは、神戸の町で戦前期を通じて景観を大きく変容させるような大火や大地震が無く、結果として緩やかに市街地の更新が進められてきたことの証左だが、同時期の大阪・心斎橋や東京・銀座と比べると地味な印象は拭えない。

三宮方面を撮影した作品では、トアロードのバウリスタビル（昭和8年（1933）竣工、現存せず）や、あるいは三宮神社の境内にあった映画館「三宮キネマ」を中心に空襲による罹災で姿を消すまで同神社周辺に形成されていた「盛り場」の様子などが捉えられているのが興味深い（注2）。また、今回は出品されなかった旧居留地と新港地区を遠望した作品「居留地遠景」では、神港ビル（昭和14年（1939）竣工、木下建築事務所）などのビルディングが西日に照らされ、浮かび上がったコントラストを捉えている。

浜手から山手を撮影した神戸市街地のパノラマ写真は、明治40年（1907）頃に小野浜沖から撮影された写真（注3）などが知られるが、中山の作品群に描写される眺望は、昭和10年代、神戸市街地の「ど真ん中」に出現した高層建築・大丸神戸店の立地と、中山の存在抜きには成立し得なかっただろう。中山は「写真」という表現方法の特性と大丸神戸店屋上の立地を直截に活かして、「神戸」という被写体と向き合うに当たっての自身の「所信表明」の意味を込めて、当時そのままの形では公表を許されなかった、これらの作品を制作したのでは、と私は考えている。

ところで、作品群「神戸風景」を仔細に見ていくと、栄町通や旧外国人居留地を中心に多く建っていた明治後期以降の著名建築家の作品を、「建築写真」のよう



（図1）《神戸風景（トアホテル）》1939年頃



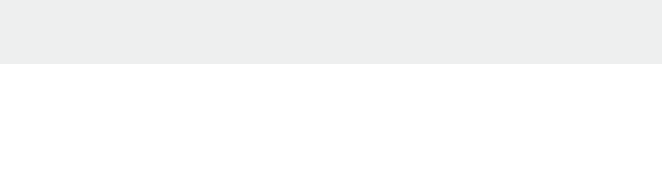
（図2）《神戸風景》1935-40年



（図3）《神戸風景（教会）》1939年頃（1996）



（図4）《神戸風景（港）》1945年頃



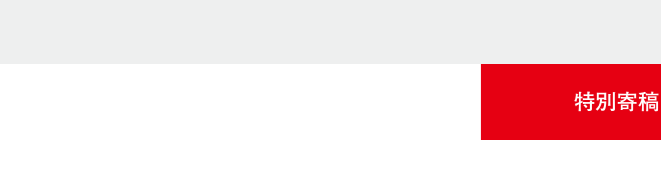
に扱った作品は極めて限定的である。その多くは街角の区々たる建物として扱われるのに留まる。むしろ中山は、トアロードをモチーフにした作品に登場する尖塔のある洋館や、「トンプソン商会」に代表される、ベランダを持つコロニアル（植民地）スタイルの商館のように、無名の職人の手がけた建物達に「美」を感じていたものと考えられる。

そうした中で、現在の神戸外国人倶楽部にあったトアホテル（明治40年（1907）竣工）の全景写真（図1）は、「トア」の名の端緒となったとも言われる、敷地内にあったお社の鳥居を含めて克明に描写しており、やはり神戸の代表的ホテルであるオリエンタルホテル（明治40年（1907）竣工、デ・ラランデ、現存せず）が、建物の一部を構図に取り込んだ程度の扱いで済まされているのとは好対照をなしている。

トアホテルは、東京帝国大学工科大学（現東京大学工学部）で辰野金吾（1854～1919）に学びながら中途退学し、アメリカで修行して建築士となった下田菊太郎（1866～1931）が設計した（注4）。明治の日本建築界の実力者・辰野に抗う形で渡米した下田に対する風当たりは、辰野の死後もなお厳しかった。その作品紹介は戦前期の主だった建築書や雑誌を通覧しても殆ど見かけない。事実上、無視されていたと言ってよい（注5）。同ホテルには、パンフレット類など数種類の資料が伝わるが、中山の作品は構図、画質両面で優れている。孤高の建築家・下田の代表作の中に、中山は何を感じてシャッターを切ったのか。

ところで、中山の眼差しは都市の周縁部にも注がれる。例えば、今回の出品作品のうちの1点（図2）は、現在の神戸電鉄東山トンネル西口周辺（神戸市兵庫区東山町）の光景が題材だ。線路脇の道を行く荷車を曳く馬と、真っ黒な穴の開いたポータル、川崎東山学校のコンクリート煙突、これらの「コンポジション」が、独特の味を出している。また、今回出品されなかったが、「教会」という標題の、高台の教会堂と背景の木造家屋の密集する町並みが対置された作品（図3）は、背景に写る鉄筋コンクリート造校舎の外観の特徴から、現在の長田区五位池町付近から神戸市立板宿小学校の方角を撮影したものと判別される（注6）。およそ観光客が足を向けそうにない地域まで、中山は足を伸ばしていたのだ。

そして、二度の空襲で変わり果てた神戸の町にレンズを向けた中山。中突堤から、建設中の木造上屋越しに海岸通を遠望した1枚（図4）は、一見したところ戦前期の作品のようだが、日本郵船神戸支店（大正6年（1917）竣工、曾禰中條建築事務所）、香港上海銀行神戸支店（明治35年（1902）竣工、ハンセル、現存せず）、オリエンタルホテルの屋根は焼け落ち、神港ビルの壁には生々しい火柱の痕、水上警察署（大正14年（1925）竣工、兵庫県當舖課、建替済）の塔屋上に対空砲陣地が残ることから、終戦直後の光景と知れる。空襲後の写真を整理した中山のア



ルバム「コウベのヤケアト」の表紙に記された脚注をなぞるならば、例えば、「焼ケタ為二生レタ」醜く焼け爛れた石造の壁や、煉瓦造の壁や煙道だけとなった旧外国人居留地の商館跡の廃墟の彼方に、中山はローマの遺跡にも通じる「美」を見出したのだろうか。

柳川に生まれ、東京で学び、欧米でキャリアを積み、やがて芦屋・神戸に拠点を構えた中山は、神戸に対しある意味で「異邦人」的な立ち位置に居たことが想像される。故に、神戸の町を客観視する中で、両極に位置する作品群「神戸風景」と「コウベのヤケアト」を撮ることができたのであろう。さらに、踏み込んだ見方をするなら、これらの作品に収められた神戸の光景は、もはや実体を越えて、中山の「心象風景」そのものとなっていたのかもしれない。

（なかお・よしたか／ひょうごヘリテージ機構神戸地区）
1970年神戸市兵庫区生まれ。
現在、「港まち神戸を愛する会」世話人、「灘百選の会」スタッフ、「全国町並み保存連盟」理事などを務める。

（注1）今回の展覧会の関連事業のレクチャーで、神戸大学大学院の梅宮弘光准教授が紹介された、神戸商業大学（当時）により昭和11年（1936）に研究用で制作されたと考えられる神戸市街地の航空写真群にも、神戸憲兵分隊によって「部外秘」扱いとする検閲印が押印されている。

（注2）加藤政洋（著）『神戸の花街 盛り場考』（神戸新聞出版センター刊）p.19 参照。

（注3）荒尾親成（編）『ふるさとの思い出写真集明治大正昭和神戸』p.44、 p.45（国書刊行会刊）所収。

（注4）林 清梧（著）『文明開化の光と闇』（相模書房刊）p.226参照。下田は、洋風建築に和風の屋根を架ける「帝冠併合式」を提唱した。現存代表作は旧香港上海銀行長崎支店（明治38年（1905）竣工）。トアホテルは進駐車に接収中の昭和25年（1950）に、失火で焼失した。

（注5）例えば辰野の弟子・片岡安や武田五一らが編纂した『近代建築畫譜』（近代建築畫譜刊行会編、昭和11年）p.361で、トアロードと山本通の交差点付近から庭木越しにトアホテルの屋根を撮影した写真が、設計者等の説明抜きで本文中の空際の挿絵のような扱いで掲載されている。

（注6）なお、「教会」の標題の由来となった作品中の教会堂の建物が、実際に五位池町附近に建っていたものかどうか、筆者では未確認である。

※協力：中山岩太の会 写真提供：芦屋市立美術博物館

麗子登場!・・・ 初夏の夜に描く星座

吉田 朋子

7月19日で閉幕した「麗子登場!一名画100年・美のショート・エッセイ 競演 神奈川県立近代美術館×兵庫県立美術館」展。非常に長く説明的であるが、これが展覧会の正式名称である。

「麗子登場!」という刺激的なコピーは、二つの願いを託して決めたものだった。まず一つ目は、なるべく多くの方々に興味を持っていただきたいということ。そのために、近代日本洋画の中でも最も知られているであろう「麗子」を全面的に押し出したのである。そして二つ目は、展覧会の性格を象徴させたいということだった。ふだんは神奈川にいる岸田劉生《童女図(麗子立像)》がやってきて、兵庫の《樹と道 自画像其四》と対面する。そのことによって、劉生の作風の変化もよく分かるし、父が娘を描くという制作の背景にも関心が広がる。このように、神奈川の作品が兵庫に「登場」して、いつもよりも深く広い鑑賞ができるというメッセージを込めたつもりである。

「○○美術館コレクション展」という展覧会は頻繁に見かけるが、今回の企画の独自性は、2つの美術館の所蔵作品を組み合わせ、なおかつ近代洋画史の概観を目指したことにあった。日本最初の公立近代美術館である神奈川県立近代美術館(1951年開館)、そして全国で2番目の公立近代美術館である兵庫県立近代美術館(1970年開館)を引き継いだ現在の兵庫県立美術館。この第一、第二の公立近代美術館のコレクションを組み合わせたらどんな歴史が描けるのか。

代表作品を中心に神奈川から51点、兵庫から56点を選んだが、高橋由一にはじまり、東京美術学校や文展の成立、大正時代の様々な動向、昭和の戦前、戦中、戦後・・・と、曲がりなりにも歴史を通覧することができたのは、やはり「鎌近(鎌倉の近代美術館の意、神奈川県立近代美術館の愛称)」との展覧会であったからこそだった。その一方で、双方とも個性の強いコレクションであるがゆえに面白い現象が起きた。黒田清輝と白馬会、そして安井曾太郎・梅原龍三郎の代表作品、



ポスターデザイン

という日本近代美術の本流的な部分がほぼ欠落してしまったのである。大正時代や昭和の独立美術協会の充実ぶりと対照的であった。

この展覧会をどのように演出していくのか、最初から確たるイメージを持っていたわけではない。なにしろ相手は、日本近代美術史そのものを作り上げてきた美術館の一つであり、ある種の畏怖を感じていた。しかし、展覧会の準備をしていく過程で、日本においてコレクションを伴う公立美術館がなかなか生まれなかったこと、そのために、作品や資料の蓄積が貧弱であった時代が長く続いたことを改めて実感した。近代洋画に関して、私たちは視覚的な記憶を十分に積み重ねていないのかもしれない、ならば出来るだけ多くの方と一緒に近代洋画を見られる楽しい展覧会にしよう、という目標が固まっていった。占領下の日本で開館し、次々に展覧会を開催していった「鎌近」の歴史と草創期のリーダーであった土方定一にも圧倒された。さらに、橋秀文学芸員をはじめ、神奈川の皆さんに本当に助けていただいたことも力になった。

演出の要として、思い切って大胆なポスターデザインを採用した。麗子像の素晴らしいはこのデザインにまったく負けなかったことにも現れているように思う。さらに、展示作品すべてに解説をつける、鑑賞のきっかけになるようなパネルを配置する、会場の基調色は明るめの黄色にすといった工夫を重ねていった。人気テレビ番組で紹介いただいたことも手伝って、当初の予想をはるかに超える多くの方々でご来場くださり、ほっとしている。

無数に生み出される作品の中で美術館に入るものはごくわずかである。今回展示された作品は、無数にきらめく夜空の星から見出された星座のようなものだったといえるかもしれない。美術館がコレクションを形成し、持ちつづけることがどれだけ大変で重要なことなのか、少しでも伝わっていればと思う。

(よしだ・ともこ／当館学芸員)



会場風景

「麗子登場!・・・」展関連事業

今回の展覧会は、約1ヶ月という短い会期で、また展覧会内容も説明によってより楽しみが深まる性格でしたので、解説を中心としたイベント構成としました。毎週日曜日のボランティアによる解説会、会期中3回行った学芸員による解説会、そして記念講演会とこどものイベントを行いました。

ボランティアによる解説会では、展覧会全体についてご紹介し、学芸員による解説会では「麗子像」に絞って説明をしました。どちらも毎回会場が満員となる盛況となりました。

記念講演会では、神奈川県立近代美術館の山梨俊夫館長をお迎えしました。「この100年で絵はどう変わったか。」という大胆なタイトルのもと、日本近代絵画の世界へと巧みに誘う講演でした。平易な語り口にも導かれながら、絵画にとってのリアリズムの変容という深い問題にいつのまにか入り込んでいく知的な時間。予定の90分を大幅に超過してはらはらしましたが、来場の皆様は熱心に聴講されていました。

こどものイベントでは、本展のハイライトとなる岸田劉生《童女図(麗子立像)》にちなみ、人物モデルのデッサンにチャレンジしました。10分～20分のポーズと5～10分の休憩を繰返しながら、モデルさんの全身像を描くという本格的な制作です。参加した15名の子供たちも大変でしたが、モデルをつとめた遊免寛子学芸員もぐったり。わずか5歳から父・劉生のモデルを務め続けた麗子さんの凄さを感じた1日でした。

(吉田朋子／当館学芸員)



山梨館長による講演会(7月4日開催)



劉生と麗子に挑戦中(7月11日開催)

「2010県展」が開催されました

今年の夏は本当に暑かったですね。当館の夏の風物詩といえば県展。今年も原田の森ギャラリーで8月7日から21日まで「2010県展」を、8月24日から29日にかけては、会場を兵庫県立美術館ギャラリー棟3階のギャラリーに移し、入賞作品46点による入賞作品展を開催しました。全7部門をあわせた応募作品の総数は626点。昨年に比べて50点ほど減りましたが、入選作品のレベルは高いという審査員の先生方の講評のとおり、201点(※)の入選作は力作揃いでした。例年注目を集める県民賞には澤村春菜さんの《ナツノカオリ》が選ばれました。日本画部門佳作とのW受賞です。

今年の県展で印象的だったのは、「彫刻・立体」部門の盛況です。本部門はこれまで多くても20点前後の応募数だったところ、この数年じわじわと応募作品の質・量ともに上向いていたのですが、ついに今年は応募数が30点を超えました。本部門が例年以上に激戦となったのは言うまでもありません。

今年の県展でも様々な場面でミュージアム・ボランティア、博物館実習生の皆さんが活躍してくださいました。最後になりますが記して感謝いたします。

※目録では202点となっていますが、そのうちの作品1点について入選取り消しとなりました。

(小林公／当館学芸員)



「2010県展」会場入口の様子。

博物館実習とこどものイベント

当館では、毎年、夏休み中に、博物館学芸員の資格取得を目指し、大学で博物館学課程を履修している学生を対象に博物館実習を実施。2ヶ月に渡り、7日間、美術館に関するさまざまなことを学び体験してもらっています。この博物館実習をより包括的且つ能動的なものにするため、昨年度より、夏休みに行く「こどものイベント」の企画及び運営をプログラムに加えました。今年の博物館実習生は28名。8月7日・8日に行われたイベントを2つのグループが1日ずつ担当しました。

今年の「こどものイベント 夏休みスペシャル」は、現在開催中の「コレクション展Ⅱ」の展示作品の中から作品を1点選び、その作品の鑑賞を通じて、ペットボトルやお菓子の箱といった身の回りのものを使ったオリジナル作品を作るというものです。この他にも対象年齢・参加人数・時間・場所等こちらで実施条件を決め、内容を検討してもらいました。1日半を企画に費やし、その後即実施という流れは、実習生には辛かったようですが、両日とも、子ども達の楽しそうな笑顔があちこちではじけ、イベント後の反省会では、「反省点も多かったが、

トピックス

充実していた」との声が多く聞かれました。美術館における教育普及活動は、作品との距離を縮め、作品を通して多くのものを受け取ったり与えたりする重要な活動ですが、これほどイメージし難いものもないのではないのでしょうか。参加条件という各種のハードルがあり、参加する機会も少ないからです。とはいえ、作品と人との出会いを演出し支援する教育普及活動は博物館業務に欠かせないものであり、彼等が将来どのような博物館の学芸員になるとしても今回の体験は活かされるのではないでしょう

か。多くの子ども達に美術館のワークショップを通して、発見する力を高めたり、創造性を発揮したりする場を提供したいという思いで行った今回のイベントですが、実は、我々美術館スタッフが、博物館実習生を「教育普及」する場でもあったわけです。

(遊免寛子／当館学芸員)



実習生と一緒に作品を鑑賞することも遠

● 編集後記

● 4月から、岩太展、レンビッカ展、麗子展、コレクション展、美術の中のかたち展、水木展、県展と、例年にもましてめまぐるしく展覧会を開け閉めしてきた兵庫県立美術館の上半年が過ぎようとしています。展覧会乱立状態を立体的・有機的な記事構成に変換するのは至難の業です。さて、今回は5月末に閉幕した岩太展の関連として、戦前の神戸の街並に造詣の深い中尾嘉孝氏にご寄稿いただきました。「作品」とは、かように多角的視点によって凝視され得るもの、あるいはそれを誘発するものなのです。● 本誌編集担当の服部正学芸員が、8月某日、海外研修のためヨーロッパに向けて出発しました。3ヵ月後の11月に帰国するまで、副担当の西田が編集を務めます。(西田)

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.28

2010年9月30日発行
編集・発行:兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷:(株)サンメディア

1941(昭和16)年、 山本通一丁目

小林 公



神戸市神戸区市街地図(部分) 山本通一丁目から三丁目周辺 神戸市立中央図書館蔵

美術館の周縁

今年の4月から5月末にかけて開催された中山岩太の回顧展では、中山以外の写真家の作品も展示された。丹平写真倶楽部の6名による〈流氓ユダヤ〉連作である。中山の個展でなぜ、と疑問に思われる方もあったかもしれないが、これは展覧会の第2部において、中山の写真がいかにか神戸の「ハイカラでモダンな街」というイメージ形成に大きな役割を果たしたかを検証したことに連なる意図があった。

中山が描き出した神戸は戦災によって失われた。展覧会の最後に紹介された、中山岩太スタジオ撮影による被災した神戸の姿を納めたアルバム、中山自身による空襲をとらえた写真、そして、終戦後に復興を目指す街の様子をとらえた写真は、その事実を伝えるものだった。〈流氓ユダヤ〉もまた、神戸という街、戦争の記憶を語る作品として重要な役を担っていたのである。

〈流氓ユダヤ〉は、大阪の写真家団体、丹平写真倶楽部に所属する田淵銀芳、川崎亀太郎、手塚榮、椎原治、河野徹、安井仲治の6名による連作で、1941年5月に開催された第23回丹平展で発表された。被写体となったのはナチスの迫害を逃れ、神戸へとたどり着いたユダヤ人たちである。この度の中山展第2部のカタログに掲載された拙稿でも〈流氓ユダヤ〉を取り上げたが、準備をする中で素朴な疑問が芽生えたのだった。そもそも、これらの作品が撮影されたのは今のどのあたりなのか？すぐに調べがつからうという甘い予想はすぐに裏切られた。戦災によって当時の建物の多くは失われ、さらに70年という時の流れは街の変化に追い討ちをかけたようなのである。人々の記憶も薄らいでしまった。

〈流氓ユダヤ〉の撮影地の大きな手掛かりとなるのが、「神戸ユダヤ協会 Kobe Jewish Community (JEWCOM)」の存在である。同会は当時、日本で唯一のユダヤ人組織で、日本にわたってきたユダヤ人たちの身元保証人の役割を果たしていた。

金子マーティンは『神戸・ユダヤ人難民 1940-1941 「修正」される戦時下日本の猶太人対策』(みずのわ出版、2003年)の中で、当時の新聞や「神戸猶太協会 アシケナージ派」の便箋レターヘッドにおいて同会の住所が「神戸区山本通



神戸市神戸区市街地図(部分) 山本通一丁目の部分を拡大 神戸市立中央図書館蔵

一丁目」とされていることを確認している。金子は同会住所を北野町二丁目、あるいは三丁目とする記事(『神戸新聞』1941年2月2日)も紹介しているが、これは例外とみなすべきだろう。

この神戸ユダヤ協会だが、正門にはシンボルとしてダヴィデの星が掲げられていた。協会住所を北野町としていた2月2日の『神戸新聞』、それから『朝日新聞』1941年2月10日の記事には、それぞれ、ダヴィデの星とヘブライ語の掲示を写した写真が掲載されている。印刷は不鮮明で周囲のダヴィデの星以外の周囲の様子などは確認しづらいのだが、〈流氓ユダヤ〉に関連する河野徹作品(大阪市立近代美術館建設準備室蔵)や『写真文化』(アルス、1941年10月)掲載の手塚榮の《ダビデの星》は同じ場所を写した可能性が高い。

神戸ユダヤ協会の所在地としては神戸区山本通一丁目有力であり、その正門にはダヴィデの星が掲げられていたことはおそらく間違いないだろう。

それでは、山本通一丁目のどこに神戸ユダヤ協会があったのか。挿図は1937年発行の「神戸市神戸区市街地図」(神戸近郊實測部編、日東館)の一部である。これが1941年前後のもので、現時点で確認できた最も詳細な地図である。この地図と現在の地図を比べると、町名や丁の境は大きくは変わっていないようである。朱線は稿者が書き加えたもので、山本通一丁目を示している。

手掛かりを求めて、この地図にも見える一宮神社の宮司、山森大雄美氏を訪ねると、快く当時の様子についてご教示くださった。神戸ユダヤ協会については覚えがないとのことだったが、とりわけありがたかったのは、河野徹の撮影した一連の写真に映っている石垣が、挿図の「丁」の字の右隣の土地、現在の神戸電子専門学校南側に残されているものと似ているのご指摘である。現地を確かめたところ、河野の写真と全く同じではなかったが、手が加えられた形跡もあるので、有力な手掛かりであることには間違いない。

1941年当時、この地図の「山」の字のあたり(現在の神戸バプテスト教会とその下の山本通東公園)には小磯良平のアトリエもあった。山森氏は小磯のアトリエの立派であったことも覚えておられ、《娘子関を征く》のモデルとするため馬を庭に飼っていたことなどをお話くださった。この戦争記録画も当館所蔵の《斉唱》も、〈流氓ユダヤ〉と同じ1941年の作である。このあたりで、画家とユダヤ人が、画家と写真家たちがすれ違っていたかも知れない。そんな想像をしながら、引き続き山本通一丁目の様子について調査をしていく予定である。70年前の様子をご存知の方、ぜひ情報をお寄せください。

※これまでの調査にあたり山森大雄美氏、神戸バプテスト教会の坂本献牧師、関西ユダヤ教団のジャック・ヨーハイ氏、神戸市立中央図書館の皆様にご貴重なご助言とご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。